

こうちおっぱい新聞

2025(令和7)年

1月27日月曜日

第3号発行

アニタ助産院

ふたたび みたび

「楽しい母乳育児」の実現を！



陣痛中お散歩の母と助産師。一緒に神頼み中

この新聞は「赤ちゃんの母乳を飲む権利」を心から大切に思う助産師が発行しています。発行は不定期です。

発行元:アニタ助産院

〒781-0270 高知県高知市長浜3番地

TEL.088-841-3000 携帯 090-9774-6722

メールアドレス midwife@blue.plala.or.jp

ホームページ・facebook・Instagramページあります。

事業内容

母乳外来

産後ケア事業(訪問型・日帰り型・宿泊型)

各自治体より委託を受けています。(R6年12月現在15市町村)

いのちの出前講座 各学校・保育・幼稚園から委託を受けています。

妊婦健診・出産取扱いは現在休止中です。

助産師 竹内 喜美恵

アニタ助産院代表(H11.5.1開設)

認定エキスパート産後ケアプロバイダー取得(R5)

子ども食堂主催「ふなつきばの子ども食堂」(H30~)

高知県小児保健協会・尾木賞受賞(R3)

高知県知事賞受賞(R4)

厚生労働大臣賞受賞(R4)

など

出版・発行物 >> 書籍:「産む」 / 新聞:「こうちおっぱい新聞」・「ふなつきばの子ども食堂便り」

パンフレット:「産後ケアのご案内」・「おっぱいのおはなし」・「お母さん達から教わったこと」

私の母乳育児

母乳育児の軌跡

〜私と子どもたちの物語〜

「おっぱいと8年間、

笑って泣いた宝物の日々」



助産院はぐはぐ

助産師 2児の母 森木由美子

助産師になって、「母乳育児支援の面白さ」を感じて、学びを深めようと思いたった矢先、私は新しいいのちを授かりました。まさか自分がこんなに『おっぱい』に夢中になるとは、出産前は思ってもみませんでした。自分の母乳育児のキセキを振り返り、今改めて母乳育児の素晴らしさを感じています。

36週で生まれた息子との出会いは、羊水過小による突然の入院、計画分娩から始まりました。混合栄養から、すぐにほぼ母乳に。産院を退院後、すぐに向かった助産院での7日間の宿泊型産後ケアは、心と身体がしみじみと癒され回復できた、貴重な時間でした。助産師さんのサポートのおかげで、母乳育児の不安もすぐに解消。畳の上で赤ちゃんとのんびり過ごした時間は、そのあとの子育ての根っこを築けたような気がしています。

生まれてすぐから、息子は最強の『背中スイッチ』を発動！おっぱいを求めてずーっと泣いていて、まるで私のおっぱいが彼のオアシスみたいでした。産後ケア入院が終わってからも、特に最初の2、3か月は、昼夜問わずの頻回授乳で、朝方寝過ごし、気づいたら赤ちゃんが泣きわめいてはツと起きたこともなんどもありました。それでも、彼の小さな体に母乳が巡り、すやすやと眠る姿を見ると、そんな疲れも吹き飛んでしまうんです。

宅急便のお兄さんにまで、おっぱい丸出しで出迎えそうになったことも、今では良い思い出です。おっぱい大好き子供だった息子は、保育園に入ってもおっぱいタイムが大好き。私にとっても、1日の疲れを癒す大切な時間でした。職場復帰したら断乳を考える方も少なくありませんが、職場復帰したからこそ、忙しい日々の中で、仕事モードから母親モードに切り替わるために、そして子どものためにも自分のために母乳育児を続けることが、私には必要だったような気がしています。

2人目の妊娠が分かり、幸せと同時につわりで辛い日々がやってきました。吐き気やだるさで、息子との時間も以前の

ようには楽しめず、心が揺さぶられました。そんな中、息子との時間をもっと作りたい、でも、つわりでいつも抱っこしてあげられないもどかしさから、息子がおっぱいを欲しがらる度に、「もうそろそろ卒業かな」と何度も思いました。でも、いざ計画断乳を試みると我が子の切ない表情を見てしまい、心が折れて、結局、「断乳」はあきらめ、いつものように授乳することに。

それから3ヶ月後、ある朝、息子の顔を見て「今日はおっぱい卒業できるかも」という予感がしました。息子に伝えると、「ニコニコしながら「うん！」と答え、その日から自然に卒乳。この経験を通して、子育ては計画通りにいかないということを学びました。そして親の気持ちとは裏腹に、子どもは自分のタイミングで成長していくものだ実感しました。

2人目の娘は、息子以上に『おっぱいモンスター』！まさか6歳までおっぱいライフが続くとは、想像もしていませんでした。毎日『おっぱいちょうだい！』攻撃に合いながら、会話ができるようになってきたから、母乳育児は、面白おかしく、時に怒りー？の感情もありましたが、今となっては懐かしい思い出です。

◇ 自由投稿大歓迎 ◇



この新聞は、アニタ助産院が自腹出費100%で発行しています。

ご賛同いただける方の投稿・ご寄付大歓迎いたします。

ご投稿は、アニタ助産院メールアドレスまで。midwife@blue.plala.or.jp

保育園では、面白いことがありました。娘が通っていた保育園では、なんと『おっぱいっこクラブ』のようなものが密かに結成されていたんです！同じように母乳を飲んでいるお友達同士で、いつまでおっぱいを飲むか、どんな味がするか、そんな話をこっそりしていたそう。娘から聞いた時は本当にびっくりしました。

娘は6歳の誕生日で、自分で決めての『おっぱい卒業！』宣言！ちよっぴり寂しかったけど、私も母親として、やり切った何とも言えない達成感と娘の成長を感じました。

A・A・ミルンの「くまのプーさん」に『6つになった』という詩があります。

- 1つのはきは
なにもかも はじめてだった。
- 2つのはきは
ぼくはまるつきりしんまいだった。
- 3つのはきは
ぼくはやつとぼくになった。
- 4つのはきは
ぼくはおおきくなりました。
- 5つのはきは
なにからなにまでおもしろかった。



今は6つで

ぼくはありったけおりこうです。

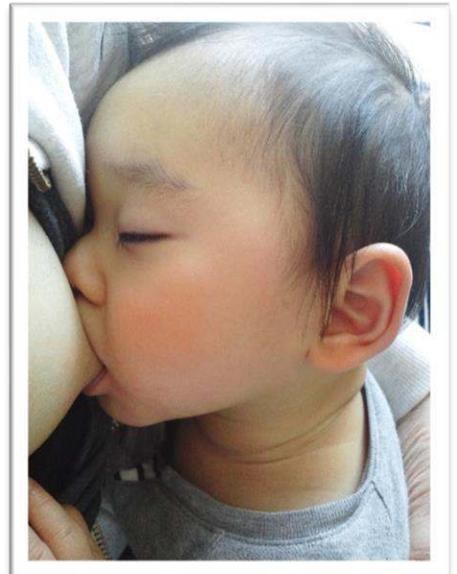
だから いつまでも

6つでいたいと ぼくはおもいます。

娘とのおっぱいライフはまさにこの詩とリンクするのです。

2人の子どもたちの母乳育児は、笑い
と涙、そしてたくさん愛情で満たされた日々でした。

子育ては、自分の計画通りに行かないこと、自分の気持ちと子どもの気持ち異なること、そんな中でも、まずは現状を受け止め、子どもと向き合うことの大切さを学びました。大変なこともあったけど、それ以上に得たものは大きかったです。今、私は自信を持って言えます。『母乳育児って最高！』



◇ おすすめ図書 その1 ◇

今回は、アニタ助産院で出産した方の必読書(ほぼ強制?)をご紹介します。



「分娩台よ、さようなら」大野 明子 メディカ出版
「食卓の向こう側」⑥ 西日本新聞社「食 暮らし」取材班
「食品の裏側」安部 司 東洋経済新聞社



戦後もうすぐ80年。日本の母乳育児に何が起こったのか？

それは戦勝国連合軍の進駐軍(アメリカ軍)の日本駐留と共に始まった。

GHQは行政のみならず教育・医療・食糧・労働・・・に伴うあらゆる指令・指導を出した。

その中で、助産師教育については、それまでの産婆教育ではなく、看護師教育の上乗せのパラメディカル職種の一つとして行われるようになった。母乳についてだけ言ってみると、それまで産婆さん達が日々研鑽して支えてきた母乳育児は、医学教育と助産師教育の中に組み込まれ、基本、助産師独自の専門技術ではなく、医師の指示のもと、保険医療の点数の範囲で実施される事となった。それは、母乳育児が医療の範疇に入れられたという事。しかし、出産前後、母乳について構おうと構うまいと別に罰則があるわけでもなく、妊娠・出産・産後、全く母乳について世話しなくてもなんの咎めもなく、そのまま退院が日常茶飯事という事に戦後20年を待たずして相成ってしまった。

それに追いつけかけられるように、乳業会社から何百万もの「なんとか費」をもらって、乳業会社の職員を出産施設へ出入りさせ「調乳指導」と称して自社の人工乳の勧めとサンプルのお土産を渡す時代へ突入。

そうこうしてる間に、医師教育・助産師教育で母乳育児はとてとても小さな分野となり、そして年月が経つうちに、出産施設で母乳の支援を充分に得られぬまま、お土産のミルク缶を

もらって退院した母は、自分と同じように退院した母、姑に囲まれており、頼るべき人もいないことに気づく。

そして、年月は経ち、戦後40年にもなろうとする頃、(自称)先進国全体が母乳育児率20〜30%にまで低下した頃に、世界的に「自然に産もう、母乳で育てよう!」という流れが、振り切った振り子の振り返しのおこった。そしてあの有名な「乳児突然死症候群に有意差のある5項目」が発表され、北欧のある国では、行政を挙げて「母乳で育てよう。親はタバコをやめよう。うつぶせ寝はやめましょう。母と赤ちゃんは一緒に寝ましょう」をスローガンに国全体が条件を整えた結果、10年を経ずして母乳栄養率が80%以上になったのと。

・・・その後も日本は振り子の振り返し程の動きもおこらず、20〜30%が50%ぐらいに上ったのでしょうか・・・というところ。その後また下がってきているらしい。

そして今は、やっぱり母乳の手当てを手厚く受けるでもなく、入院期間もますます短くなり、「ミルクも昔と違って良くなったからね」母乳大変だからミルクにしたら〜?このたまう産科医・小児科医・助産師が存在するようなことに・・・。人工乳が良いか悪いかは全く問題ではなく、何故に母乳育児について、専門職として最低限の理解と知識と何よりも新しく育つ命への慈愛を、その業務に表現できないのが問題です。(竹内 喜美恵)

アニタ助産院
ふなつきばの子ども食堂
 助産師 竹内 喜美恵

〒781-0270 高知県高知市長浜3番地
 Tel&Fax 088-841-3000
 携帯Tel 090-9774-6722
 E-mail midwife@blue.plala.or.jp
 WEB・Facebook・Instagramへ-ジ-あります。




元氣な子を
元氣な身体で
元氣に産み
元氣に育てる。
これを実現するためのお手伝い、
これが私の仕事です。



幸せな身一つの日々、
喜びと共に身二つに、
笑い駆けながら共に育つ母と子...
これが私の願いです。

ご寄付
 ありがとう
 ございました!



日付	金額	振込先	備考
06-08-28			おはじめ
06-10-15	¥5,000	*****5,000	振込
06-10-17	¥5,000	*****10,000	振込
06-10-29	¥5,000	*****15,000	振込
06-12-11	¥10,000	*****25,000	振込
06-12-11	¥5,000	*****30,000	振込
06-12-11	¥5,000	*****35,000	振込
06-12-13	¥30,000	*****65,000	振込
06-12-20	¥10,000	*****75,000	振込

◇ 寄付などお振込先 ◇

高知信用金庫 瀬戸支店

普通 0367504

口座名:こうちおっぱい新聞 竹内喜美恵



現在の母乳育児の問題点についての私見

私事です(?)が、私が出産のお手伝いをした少なくとも助産院で出産した方々は、母乳栄養率は限りなく100%に近いと思います。統計をとっていないので断言はできません。

そして、私は、その方々のお手伝いをすべく、母乳外来を開いていました。

ところが、全然現れない。年に1人? えっ? みたいに…。かといって、母乳やめたとの風の便りもどこからも届かないし、それではと、当院出産以外の方々のご相談にも乗るようにした次第です。

高知県一般(こうちファミリークリニックは例外。ここはBFH認定の病院です)の母乳栄養率とかなりかけ離れています。

何が違うのでしょうか。

来られる人達が何か違うのでしょうか? 私のゴッドハンド?(ない)。何が違ったのか今思い返してみても、来られた方々に共通していた事がひとつだけありました。確かに確率的に有意差ですよ。(たぶん)それは来られた方全員「母乳育児」を「く自然の当り前の事柄」として、気負うでもなく、無理するでもなく、至極自然にふんわりと受け入れている人達だったという事です。

で、私はというと、特にしつこきりでおっぱいの世話をすべしというほどの事もなく、そっと見守り、適時支えるというふうなところでした。

で、退院後は産後2週間に訪問し、家庭での

ご様子を確認させてもらい、産後1ヶ月健診はアニタに来て頂きました。以後、それっきりの方もおられるし、お母さん達の集まりの日に目にかかったり(アニタが集合場所)、合同同窓会でたくさん懐かしい顔と成長ぶりを垣間見ます。

…という訳で内容で言えば、ほぼ何もしていないかと思う。

時代に合わせて(?)、新生児の黄疸(ミノルタ黄疸計)、血糖(デキスター)、血中酸素濃度(パルスオキシメーター)、体重、バイタルチェック(TPR)はいつでも測定できるし、入院中に小児科医の往診をお願いします、連携病院のNICUのホットラインをお守りとして大切に持っておりました。(それだからといって、安全・安心、何も起こらないとは無論思っておりませんが)

今、考えてみて、それぞれの母児が何歳まで母乳で、どうやって終わったかを全部知っておきたかった。何しろ統計をとる気ゼロ(苦手とも言う)なもので…。とても残念が残ります。

辛かった事は、そのお母さん達のうちの2人もが、授乳中(10か月頃)に乳癌が見つかったことです。言葉に表わせないショックでした。

お話がそれでした。

ただ一つ思ったのは、生き方、考え方、価値観、世界観において、くく自然にすでに母乳を受

け入れていたということです。前置きが長くなりました。

母乳育児の問題は3つ。

1. 出産よりずっと前に持っている価値観を自己点検する場が少ない。

2. 母乳育児を支える家庭環境が、とても多くの母児から失われてしまっている。

3. 母乳育児の専門分野の一部であろうはずの産科医・小児科医・助産師がその教育課程において、母乳育児への正しい知識を教えられていないかのような節がみられること。

それは、現に、母乳育児に、事実に基づいた知識と技術で仕事をされており、その認識の進化を業務に顕現されている産科医・小児科医・助産師に、その知識と技術はどこから得られたものであるかを問えばよく分かる事ではないでしょうか…。

以上、「この現状をみながら死ぬのはイヤだ」と思うに至った一助産師のつぶやきでした。こゝ一読下ろしてありますがどうでしょうか。

(竹内 喜美恵)



母乳育児支援ネットワーク

母乳代用品のマーケティングに関する国際基準のページより

<https://bonyuikuji.net/?p=317>

国際基準の主な内容（全文ではありません）

1. 消費者一般に対して、母乳代用品の宣伝・広告をしてはいけない。
2. 母親に試供品を渡してはならない。
3. 保健施設や医療機関を通じて製品を売り込んではならない。これには乳児用調製乳の無料提供、もしくは低価格での販売も含まれる。
4. 企業はセールス員を通じて母親に直接売り込んではならない。
5. 保健医療従事者に贈り物をしたり個人的に試供品を提供したりしてはならない。保健医療従事者は、母親に試供品を手渡してはならない。
6. 赤ちゃんの絵や写真を含めて、製品のラベル（表示）には人工栄養法を理想化するような言葉、あるいは絵や写真を使用してはならない。
7. 保健医療従事者への情報は科学的で事実に基づいたものであるべきである。
8. 人工栄養法に関する情報を提供するときは、必ず母乳育児の利点を説明し、人工栄養法のコストや不適切な使用法によるリスクを説明しなければならない。
9. 乳児用食品として不適切な製品、例えば加糖練乳を乳児用として販売促進してはならない。
10. 母乳代用品の製造業者や流通業者は、その国が「国際規準」の国内法制を整備していないとしても、「国際規準」を遵守した行動をとるべきである。

主な参考文献

IBFAN(2019)/母乳育児支援ネットワーク訳(2021)乳児の健康を守るために:保健医療従事者のための「母乳代用品のマーケティングに関する国際規準」ガイド, 母乳育児支援ネットワーク.

United Nations Convention on the Rights of the Child, Committee on the Rights of the Child. (2019) Concluding observations on the combined fourth and fifth periodic reports of Japan, 5 March 2019.

UNICEF/WHO (2009) 赤ちゃんとお母さんにやさしい母乳育児支援 ベーシックコース, 医学書院.

Palmer, G.(2009)/本郷寛子,瀬尾智子訳(2015)母乳育児のポリティクス:おっぱいとビジネスとの不都合な関係, メディカ出版.

WHO (2016) Guidance on ending the inappropriate promotion of foods for infants and young children.

WHO/UNICEF/IBFAN.(2022) Marketing of breast-milk substitutes: national implementation of the international code, status report.

(2009年11月、2018年7月、2019年7月、2022年8月 一部改訂)

◇ おすすめ図書 その2 ◇

「あなたのために いのちのスープ」辰巳芳子 文化出版局

「村上昭子の自然食離乳食」わたしの赤ちゃん編集部編

「丈夫な体質をつくる自然育児法」村上龍雄、竹内政夫 主婦の友社

「子育てに手遅れはない 新しい母の本」北畠道之 朝日新聞社発行

「ちいさい・おおきい・よわい・つよい」「おそい・はやい・ひくい・たかい」毛利子来・山田真 編 ジャパンマシニスト社

